



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山村留学研究の到達点と今後の課題：諸階層による山村留学の評価と矛盾の克服意識を通じて
Author(s)	川前, あゆみ; KAWAMAE, Ayumi
Citation	社会教育研究, 17, 61-73
Issue Date	1998-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28521">https://hdl.handle.net/2115/28521</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_P61-73.pdf



# 山村留学研究の到達点と今後の課題

— 諸階層による山村留学の評価と矛盾の克服意識を通じて —

川 前 あゆみ

## I はじめに

農山漁村における山村留学は、子どもの自然体験・生活体験・社会体験の欠如が問題となる現代社会において徐々に注目を集め、1997年度は31道府県87自治体で実施している<sup>(1)</sup>。そのうち、最も実施数が多く、伸び率が高い北海道では、26自治体で42校160人を数える。

1976年に長野県八坂村で始まった山村留学は先駆的な役割を果たし、その後全国各地で山村留学を導入する自治体が急増した<sup>(2)</sup>。しかし、これまでの山村留学の先行研究では、自然体験や勤労体験など体験学習内容の積極面のみを取り上げたり、山村留学に参加する側の意識分析に傾倒した研究がほとんどであり、山村留学を受け入れる地元や学校の評価を明らかにした研究はなかった。また、山村留学を評価する場合も、地元の子どもや都会の子ども、及び教師の成長を長期的・継続的な観点からとらえる視点が弱かった。そのため、山村留学を導入した地域や学校教員がどのように相互に評価し、どのような意識を持っているのかを明らかにすることは、今後の山村留学の方向性や生涯学習社会下における学校と地域社会の在り方をも規定するものである。山村留学の運営及び教育効果は、そもそも受け入れの学校や里親と山村留学生との個別的な契約が存在すれば成り立つものではなく、学校と地域と里親が有機的に結び付いてはじめてうまく展開するものである。

本稿では、実施数が最も伸びている北海道の山村留学の現状と課題を総合的に明らかにすることを課題としている。そのため第一に、北海道内の山村留学の動向をとらえつつ、先進事例の実態を社会的諸階層ごとによる山村留学の評価と課題について意識調査から明らかにしたい。第二に、それらの実証分析から、山村留学による学校・地域の改善課題をとらえたい。これらの課題を明らかにすることによって山村留学制度の今後の発展課題、さらには、山村留学制度を契機とした学校・地域変革の重要性をとらえることができよう。

## II 北海道町村統計分析による山村留学の現状と課題

### (1) 北海道全道自治体・教育委員会の評価と動向

全道町村自治体・教育委員会における山村留学の意識調査については<sup>(3)</sup>、結論的に述べれば、山村留学に対して非常に高い関心を示し、将来的に導入を検討している町村が多かった。今後の普及に関して、非実施町村においても山村留学の教育効果を高く評価していること、教育効果のみならず、

学校や地域の活性化にもつながるとする自治体が約7割の町村で見られることが明らかとなり、教育効果・地域振興効果に関するこの期待の高さは、山村留学制度導入への潜在的条件になると言える。

また、非実施町村における山村留学への今後の意向として、「地域の理解・条件が整えば自治体として支援する」としている町村が56.2%と高いことから(表略)、山村留学制度の正確な情報提供と山村留学の効果について、行政のみならず、地域住民に対しても啓発して行くことが山村留学制度の普及へ向けた今後の大きな課題であることが明らかとなった。

このように自治体・教育委員会の山村留学に対する期待が高いのは、特に過疎化が激しい農山村において、学校教育の充実が地域を活性化させる一つの重要課題になっているからである。

## (2) 山村留学実施町村自治体・教育委員会・実施学校の評価と動向

山村留学を実施している多くの町村は<sup>(4)</sup>、学校存続のための言わば手段として山村留学を導入しているが、その効果は単なる学校存続の効果のみならず、山村留学に参加する側はもちろん、受け入れる側である地元のあらゆる社会的諸階層に効果があるとしている(表略)。

また、山村留学を実施している地域では、学校・地域・行政の協力関係が一層強くなっており、山村留学には教育効果・地域振興効果が大いにあるとしている。

しかし一方では、全体として積極的な評価をしながらも、矛盾や問題も抱えていた。例えば、教育委員会や学校の評価では(表略)、「里親家庭数を確保・拡充することが困難」「里親の精神的負担・経済的負担の多さ」「受け入れる留学生によっては、教育指導上問題がある」「学校・教員の負担が大きい」など、いじめや不登校・非行といった内面的な課題を持った子どもの留学による地元生への「悪影響」や生徒指導の困難、さらに、里親や学校・地域の負担感を挙げている。

今日の深刻な教育問題、いじめ・登校拒否・自殺といった教育事情を鑑みれば、山村留学に救いを求めるケースも増えて行くと思われる。今後、内面的な課題を持った子どもが留学する場合の対応の確立が強く望まれ、さらに地域と行政と学校との連携による生活指導が重要な課題となっている。

以上のように、山村留学制度実施の有無にかかわらず、子どもどうしの交流や児童生徒数の増加による学校活性化、並びに留学生保護者と地元住民との交流による地域の活性化など、山村留学による教育効果・地域振興効果が高く評価されている。しかし、制度の導入・推進にあたっては、様々な困難や問題を抱えていることも明らかとなり、これらの矛盾や問題も含めた解決方策をとらえる必要がある。ただし、これらの困難点を評価する場合にも、短期的に見て、矛盾があるとするのではなく、その評価自体も変化しているため、長期的な視点に立って評価していく必要がある。

### III 山村留学に関わった社会的諸階層別による山村留学の評価と課題

#### —北海道S町を事例として—

山村留学の評価は、関わる人々の立場によって異なることから、多様な階層（立場）による評価をとらえる必要がある。そのため、山村留学に参加する子ども・父母や、山村留学を導入した学校・地域など、社会的諸階層ごとに山村留学の評価や意識をとらえた。本稿での事例としては、公設の留学センターを設置し、学校と地域が連携しながら様々な体験学習や生活指導を行っている北海道S町を取り上げた<sup>(5)</sup>。その結果、どの階層も総体的には積極的に評価しているが、社会的諸階層によっては山村留学に対する矛盾や改善点などの今後の課題も指摘されている。以下、諸階層ごとに、評価と課題をとらえていく。

#### (1) 地域住民から見た山村留学の評価と課題

地域住民の評価では<sup>(6)</sup>、「賛成」が41軒37.3%と最も多く、次いで、「どちらかという賛成」が39軒35.5%と併せて、80軒の72.7%の地域住民が山村留学制度を支持している（表略）。一方、山村留学制度に否定的な層は、「どちらかという反対」7.3%、「反対」2.7%の、併せて11軒10.0%ではあるが、存在している。とりわけ、若い20代から40代の地域住民に、山村留学制度に比較的消極的な者が多い。若い年代層は、学齢児童生徒を持つ年代であり、自分の子どもへの影響を中心として、不安を抱えるのも当然である。

今後の山村留学のかかわり方では、「あまりかかわろうとは思わない」が43軒39.1%、「ほとんどかかわろうとは思わない」が20軒18.2%と、両者を併せると全体の57.3%の過半数が、今後山村留学制度とのかかわりには消極的な意識を持っている。

このように、地域住民が大局的な見地から山村留学制度の効果をとらえると、高く評価しているが、他方で、留学生、特に地元生にとっての山村留学の効果について評価した場合には、その評価に若干差が生じる。この原因の一つは、留学生が地元生に与える影響である。すなわち、留学生の素行が地元生にどのように影響するかによって、地域住民の意識も変わるのである。

地域住民に山村留学の評価を自由に書いてもらった記述から、まず積極的な意見を抽出して見ると（表1）、一つには、山村留学があることで学校や地域の活性化にもつながり、子ども達にも良いという評価がある。二つには、子どもが自然や動物と接することの重要性から山村留学を評価している。三つには、地元生にとって留学生の刺激は欠かせない存在になっているとし、子どもの成長には山村留学が有意義だとする意見に大別できる。

しかし一方では、山村留学制度の各関係機関の協力・連携の不備を指摘する声や、留学生の受け入れ人数を増やしたことで生ずる問題を指摘する声がある。そして、最も問題視されているのが、山村留学制度導入時に比して、留学生の質の変化を指摘する人が多いことである。留学生の目的意

識の欠如やこの制度の不理解による影響が大きいとしている。

山村留学制度の賛否の階層性は、若い年代層に消極的な意識を持っていることが既に明らかとなっているが、大局的な見地からは山村留学の効果があると考える住民が大勢を占めている。しかし、地元生にとっての山村留学の効果は、有児家庭ほど消極的な評価をしている。この意識は、山村留学制度の賛否にも反映されているが、その大きな要因として、地域住民からすると、留学生の目的意識の欠如や留学生の受け入れ人数を増やしたために、地元生に与える悪い影響が大き過ぎることが言える。このことが、山村留学の効果があることは認識しつつも、消極的な評価の誘因となっている。しかし、後述するように、必ずしも児童生徒から見ると、否定的ではない。

今後の課題としては、別稿の学校教員の意識でとらえた課題と同様に、①目的意識を持った留学生の受け入れ、②各関係機関の協力・連携態勢の強化、③地元生と留学生の人数のバランスの考慮、の3点が挙げられよう。

## (2) 里親から見た山村留学の評価と課題

一方、負担が大きいとされる里親の評価は<sup>7)</sup>、地域住民よりも高く、留学生への評価も高かった。確かに、留学生を預かる気苦労が多いとされているが、山村留学を契機として、里親自身が農村の良さに気づいたり、考え方や価値観の違いを学習していることが明らかになった(表略)。この地元から見た山村留学への評価で、地域住民よりも負担が大きいとされる里親の方が、山村留学を高く評価していることは(表略)、直接子どもとふれあう里親と第三者的な立場の地域住民との相違による。例えば、里親経験の積極面に、留学生とその家族が山村留学を通して、今もなお里親と交流が続いていることを挙げる人が多い。さらに、家族の一員として子どもが成長してくれたことや、留学生が里親に心を開いて接してくれたことなど、里親家庭と留学生との一線を越えた生活ができたことが嬉しかったという。また、留学生との生活が、里親自身の子女の成長過程に大きな教育効果があったとする声もある。これは、農村では日常的に学校以外で子どもと接する機会が少ないために、里親自身の子女に色々な刺激を与えたものである。また、留学生の家族を通して、都市部の生活や文化などの話や考え方を聞けるという積極面が挙げられている。これらの意識は、直接留学生とかかわりを持つ里親にしか感じられない意識であり、第三者から見た見え方とは相反するものである。

以上のように、里親が留学生を受け入れたことで、交流が深まり、色々な考え方を知ったこと、自分の子どもにも効果があったことなど、積極的な効果があったとする意見が多く見られた。しかしその一方では、留学生の留学意識の低さや躰の問題など、受け入れ留学生によっては、受け入れ側の気苦労も多いことが明らかとなった。

以上のように、里親が山村留学制度を通して、自分たちの住んでいる農村の良さを都会から来る人達から逆に学んでいると言える。これらの里親の持つ意識は、山村留学制度の評価や今後の山村

留学制度の在り方を規定するものである。

今後の課題としては、第一に、里親の物理的な負担を軽減すること、第二に、何か問題が生じたときの相談窓口を設けるなどの支援体制を整備すること、第三に、地域住民にも何らかの形で留学制度にかかわってってもらうように働きかけ、理解を図ることの3点が挙げられる。

### (3) 山村留学生保護者から見た山村留学の評価と課題

山村留学に参加させた山村留学修了生の保護者の評価を見ると<sup>(8)</sup>、留学前の学校よりも留学校を高く評価しているが、特に体験学習に関しては非常に優れているとし、教師への評価も非常に高かった(表略)。

一方、山村留学全体の評価では、親の積極的な評価は65.2%で留学生本人の評価よりも約20ポイント低かった(表略)。親の方が評価が低い背景には、体験や自然環境での生活を目的としながらも、偏差値の向上や山村留学で子どもの劇的な成長を期待する親の考え方が見られた。

### (4) 子どもから見た山村留学の評価と課題

山村留学の恩恵を最も享受すべき子どもの評価を<sup>(9)</sup>、山村留学修了生と地元卒業生に分けて相対的にとらえたが、山村留学修了生の84.6%、地元卒業生の83.4%と、どちらの階層も山村留学を非常に高く評価している(表略)。留学生自身の参加動機が親の勧めや、いじめ・不登校などの課題を持った留学であっても、結果的に山村留学に参加して良かったとする子どもが多い(表略)。また、体験学習や農村の自然環境・人々の暖かさなど、傍目にはとらえられない内面的な成果が明らかになり、これらのことが過疎化が激しい農村で暮らす人々の意識に自信と誇りを持たせ、地元生にも自分の住んでいる地域の良さを見直す契機となっている(表略)。地元生にとって山村留学の成果には、友達が増えたことや、地元生も山村留学があることでより多くの体験をできたことが明らかになった。さらに、留学生の質の変化や問題行動などの影響を地元生が受けたとしながらも、それらも含めて良い刺激になったとしている(表2)。

地元生及び留学生から見た山村留学の課題としては、留学中のみならず、広く事後の交流を深めることや、センターでの生活規則や運営における再検討の必要性、そして目的意識を持った留学生の受け入れ、及び制度運営上における各関係機関との連携の強化の必要性を挙げている(表略)。

### (5) 転出教員から見た山村留学の評価と課題

山村留学制度を包括的・客観的に、教育専門職の立場からとらえられる転出教員から見た評価と課題では<sup>(10)</sup>、教員が実際に勤務していた時は負担感が先立つが、他の学校に転出すると、当時を振り返って、子どもとの出会いや様々な経験を積極的に評価している教員が多い(表略)。山村留学を契機として、教員自身の意識の変容も見られ、視野の狭さや発想の貧困さ、現行の教育制度や教育

内容の矛盾・疑問を感じた点など、自分自身の価値観や考え方が変わったとする教員が多いことが明らかになった(表3)。

また、他の社会的諸階層で、地元生が留学生から悪影響を受けるとする指摘には、「地元生は意外と留学生の悪影響に染まらない逞しさを持っている」とか、それを「寛容できる柔軟さがある」という意見もある。農村の子どもに一般的に言われる消極面を、山村留学を契機として、負けん気や寛大さなどの積極面に転化してきたことも明らかになった。

しかし一方では、留学生の受け入れに関して管理職のみならず、全教員も含めて決定することの重要性、また他の都府県の高校入試の受験に関しては、関与しないなどの留学校の精神的・身体的負担を軽減する必要性が挙げられた。

教員も留学生の指導や学級経営の困難や大変さを感じながらも、教育専門職としての実践力や指導力を高める機会となり、教員自身が山村留学制度を契機として学習し、教師として成長したことが明らかとなった。

#### IV 山村留学制度活用による学校・地域の変革と課題

これまで北海道を事例にして述べてきたが、非実施町村も含めて山村留学への関心が高かった一方で、山村留学実施町村では、全体として積極的な評価をしながらも、矛盾や問題も抱えていた。

さらに、地域住民は概ね山村留学に賛成しているが、制度運営上の困難や矛盾点が浮き彫りになり、一部の住民は地元生へ悪影響を及ぼすとして、山村留学に消極的である。現教員の評価でも、山村留学の矛盾や疑問を持つ教員も少なからずいる。子ども達と日々格闘している教員にとっては、子どもへの教育効果や学校・地域への効果がとらえきれないのである。

しかし、これらの問題点を学校構成員の側から長期的にとらえると、山村留学の主人公である留学修了生や地元卒業生の評価では、山村留学を非常に高く評価し、様々な影響を受けたとしながらも、事後も交流を続けている。そして、転出教員の評価は、勤務当時は負担に感じながらも、長期的に見て、地元生・留学生の双方に教育効果があること、教員自身も教育専門職として力量を高める機会になっているとしていた。

以上のように、長期的に見ると、都会と農村の子どもの双方に、山村留学による成果や学校・地域の活性化があったことは明らかであり、これらの長期的な成果を長期的にとらえ直すことのできる検討委員会設置などの制度運営の改善が今後の課題になり得よう。

今後の制度改善課題で明らかになった点は以下の通りである。第一には、様々な参加動機を持った子どもを受け入れることで生ずる児童生徒指導の問題や、生活環境を異にした子どもたちの積極面を学校運営・学級運営にどう活かしていくかなど学校を中心とした変革の課題がある。これらの課題は、単に時間割を変更したり、学級内部のみの学級運営で対応できるものではない。教員が個

別に教育実践をする以外にも、他の教員と子どもの指導や日頃の実践を互いに評価しあい、さらに、管理職も含めた学級・学校運営を気軽に議論できる場を設けることが必要である。また、へき地小規模校が優れた教育実践を担えるような教員の意識変革も重要である。これらの学校変革は、山村留学の実施有無にかかわらずへき地校及び学校教育全体の課題だと言える。

また第二には、学校の変革だけでは解決できない課題がある。それは、子どもが学校生活以外に、家庭生活や地域社会の身近な人間関係や社会関係の中からも学習するため、学校と地域の連携や地域の教育力の向上が重要になるからである。そのため、地域においても、山村留学発展のためには従来の閉鎖的な同質性から異質な者を含めた協同性の形成や、地域や農村の良さと誇りを改めて自覚するような意識変革が求められる。

これらの意識変革の必要性は、山村留学者や地元卒業生・里親の社会的諸階層の意識からも明らかのように、住民自身が山村留学を契機として、地元の農村の良さや農業の重要性に気づく機会となる。特に里親制度は、山村留学制度が都市部の子どもを受け入れて世話をする、単なる受け皿的な制度ではなく、留学生を受け入れた里親自身の自己教育活動の契機を含むものであった。留学生やその保護者を通して異文化理解や農村の良さを再認識するという生涯学習活動にも連動していたのである。それらの意識変革が、山村留学を発展させたり、学校と地域の連携を強めたり、過疎が激しい農山村に活力をもたらすことにつながるのである。

この山村留学の実証研究から、山村留学制度活用による学校運営や生徒指導、地域住民の意識変革、そして学校と地域の連携の在り方など、山村留学の枠組みにとどまらない学校や地域の変革の課題が明らかになった。また、教育や地域振興などの効果は、過疎の激しい農山村の学校や地域発展を可能とさせるもので、地域づくりに役立ったり、地域課題を見いだすなどの新たな地域創造にも貢献するものと言える。

山村留学の研究は、これまでの、都市中心、教師中心、画一性、同質社会性の側面を強く含む日本の学校教育の在り方自体の再検討を求めるもので、生涯学習社会下の地域社会における教育計画の在り方を示唆している。

## V おわりに

この山村留学の多様な諸階層の評価による実証研究から、全体としては高く評価されつつも、山村留学制度の矛盾や克服の課題も明らかとなった。しかし、長期的な視点で、山村留学の評価をとらえると、教師も地元の子どもも里親をはじめとした地域住民も、矛盾だと思われてきたことを視野を広げる良い刺激として受け止め、成長する機会となっていることが明らかとなった。

そしてまた、山村留学制度活用による学校運営や生徒指導、地域住民の意識変革、そして学校と地域の連携の在り方など、山村留学の枠組みにとどまらない学校や地域の変革の課題が明らかにな

った。

近年において、全国的にへき地小規模校の学校統廃合が農山漁村で進められており、学校が廃校になることによって地域社会も衰退するという危機感がある。そのため、学校を存続させるために山村留学を導入している学校も多いが、単に学校の存続維持にとどまらず、教育効果や地域振興効果などの積極面が明らかになっている。これらの効果は過疎の激しい農山漁村の学校や地域の発展を可能とさせるものであり、新たな地域づくりにも連動するものと言える。

## 注

- (1) 山村留学は、都市部の子どもが農山漁村に住民票を移して一定期間定住し、地元の子どもと共に学び、遊ぶ経験を日常生活の中で行うものである。直接体験の欠如が叫ばれている現代において、都会にはない豊かな自然や地域の人間関係・社会関係に学びながら、また、小規模校における少人数教育や教師との触れ合いなど、子ども達は山村留学を通して貴重な体験を得ている。
- (2) 1976年に長野県八坂村で始まった山村留学は、子どもへの教育効果や農山漁村における学校・地域の活性化などの積極的な側面から、その後全国各地で導入され、実施数は一貫して増加している。しかし、特に近年に至っては、純粹に自然や社会体験・勤労体験学習を参加動機とする子どもばかりではなく、いじめや不登校といった内面的な課題を抱えて山村留学をする子どもも増加していると言われている。山村留学にさまざまな参加動機を持つ子どもを受け入れる地元からは、地元生への悪影響や地元の負担などを懸念する声も挙がっている。
- (3) ここでのアンケート調査方法は、非実施町村を含めた全町村教育委員会及び自治体を対象に第一次アンケート調査を1995年10月に行った「山村留学に関するアンケート」より川前が集計。北海道全町村180町村の教育委員会と自治体に分けて郵送し、教育委員会の回収率は159町村で88.3%と非常に高く、自治体からの回収率も145町村で80.6%を得ている。
- (4) 1995年10月に行った山村留学実施町村教育委員会及び自治体における「山村留学に関する第二次アンケート」より川前が集計。教育委員会の回収率は19町村で100%と非常に高く、自治体からの回収率は15町村で78.9%を得ている。さらに、北海道内の実施学校にも調査を行いアンケート回収率は、26校100%である。
- (5) 本稿の事例として取り上げたS町立U小学校区・U中学校区は、酪農業を主な地域産業とし、北海道で2番目に山村留学を導入した地域である。1996年度の学校規模は、小学校が5学級(特学1)で、全校児童数47人(留学生14人)、中学校は3学級で全校生徒数39人(留学生14人)である。
- (6) 北海道S町U中学校区の教員世帯を除く、全世帯223世帯に対して1996年10月に行った「山村留学に関するアンケート」より川前が集計。110世帯から回答があり、回収率は49.3%とな

っている。

- (7) 北海道S町U中学校区の里親14世帯に対して1996年10月に行った「山村留学に関するアンケート」より川前が集計。9世帯(13人)から回答があり、回収率は64.2%となっている。
- (8) 1989～1996年3月までに北海道S町U小学校・U中学校の山村留学を修了した留学修了生保護者37世帯に対して1996年10月に行った「山村留学に関するアンケート」より川前が集計。23世帯回答があり、回収率は62.1%となっている。
- (9) 1989～1996年3月までに北海道S町U小学校・U中学校の山村留学を修了した留学修了生44人に対して1996年10月に行った「山村留学に関するアンケート」より川前が集計。26人から回答があり、回収率は59.0%となっている。また、同時期に卒業した地元卒業生53人にも調査を行い、24人から回答があり、回収率は45.2%を得ている。
- (10) 1988～1996年3月までに北海道S町U小学校・U中学校にかつて勤務していた教員30人に対して1996年10月に行った「山村留学に関するアンケート」より川前が集計。25人から回答があり、回収率は83.3%と社会的諸階層の中で最も高い回答率を得ている。

#### 《山村留学に関する参考文献・資料》

1. 七戸長生・永田恵十郎・陣内義人著『農業の教育力』。農山漁村文化協会。1990年。
2. 神田嘉延・岩橋法雄・玉井康之・朝岡幸彦著『教育と福祉』。高文堂出版社。1994年。
3. 自由国民社編集部編『山村留学ガイド』。自由国民社。1993年。
4. 柘植書房編集部編『小中学生のための山村留学』。柘植書房。1989年。
5. 育てる会『全国の山村留学実施状況調査報告書—全国各地の山村留学事業実践事例集』。育てる会1997年。
6. 青木孝安「山村留学—その歩みと現在—」。農村開発企画委員会編『教育と農村』。地球社1986年。
7. 岡崎友典編著『改訂版 地域社会と教育』。放送大学教育振興会。1996年。
8. 神田嘉延「山村留学制度と子ども—鹿児島県霧島町永水小学校校区の事例を中心として—」。『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第5巻。1995年。
9. 玉井康之著『北海道の学校と地域社会』。東洋館出版社。1996年。
10. 北海道教育委員会「山村留学等実施状況」。1997年5月1日。
11. 川前あゆみ「山村留学における教育効果・地域振興効果と発展条件」『北海道教育大学釧路校教育学研究室研究紀要』第一号。1996年。
12. 川前あゆみ・玉井康之「山村留学実施町村から見た山村留学の教育効果と発展条件—北海道の町村・教委調査統計による動向分析—」『僻地教育研究』第51号。1997年。
13. 玉井康之・川前あゆみ「転出教員から見た山村留学の教育効果と教員意識の変容—北海道S町を事例として—」『北海道教育大学紀要』第48巻。1997年。

14. 川前あゆみ・玉井康之「子どもから見た山村留学の評価と体験学習が果たす役割－北海道S町を事例として－」『釧路論集』第29号。1997年。
15. 川前あゆみ・玉井康之「受け入れ地域住民・里親から見た山村留学の評価と今後の課題－北海道S町を事例として－」『僻地教育研究』第52号。1998年。

表1 地域住民から見た山村留学制度に関する意識

ケース	自由記述意見
91	留学生の父母が大変地域活動に協力的で、学校教育活動も子どもが増えることで活性化されたと思う。
39	時間が経てば、思い出になり懐かしいだろう。
38	もっと多くの留学生を受け入れられたら子どもが外で楽しむ姿を見られる。 <u>老人も喜ぶ。</u>
87	良いことも悪いこともある。
78	子ども達の将来に、自然と動物に対する思いやりや人間性の成長に大変有意義。
77	一定期間でも自然に触れて心休まる時を持ち、心の故郷の地となり、 <u>地元生も留学生に接することで成長する</u> と思う。今後も続けて欲しい。子どもはいないが協力したい。
49	都会では考えられないような閉鎖的なことも、良い意味で打ち砕いてくれるのが山村留学である。 <u>地元生の成長には欠かせない存在。</u>
48	<u>留学生の人数と質は、地元生を基本に人数が多すぎても質が良すぎても悪すぎても駄目。</u> 留学制度の本質・意義を突き詰めていくと、必ず日本の教育制度の壁に突き当たる。
33	地域住民として <u>特に農村活性化につながっている。</u> 子ども達の積極的な態度に対して、一段と <u>自分の職業に誇り</u> を持てる。
95	留学生の親が地域と交流することにより、都会では得られない良い所を知ってもらえる。
96	制度は、 <u>教委・学校・地域の三者がお互いに協力</u> することが大切。
20	まずまず良い成果を上げているのではないかな。
102	受け入れには、 <u>この制度の目的を理解した人の受け入れ</u> が地域や留学生の双方に、よりよい方向で長続きすると思う。
25	文部省に、援助することを考えてほしい。
32	長い目で見守って欲しい。
103	地域の方々がもっと里親になって、家族の一員として受け入れてくれたらと思う。
106	劣等感を伴う感情の中で、切琢磨されて自分を磨いていくことしかない。
70	山村留学を導入しなければ、学校の統合や過疎化されて寂しくなる。
94	留学制度には限界がある。
84	<u>地元生と留学生が接することで、多くのプラス面がある。</u>
101	中3での受け入れは、地元生にとって入試を控え、新たな負担となる。里親・学校・地域・センターとの繋がりが不十分。
2	<u>人数は程々が良い。</u>
42	子どもがいない家庭もあるので、何らかの形で接点が見つかれば、もっとこの制度も地域に根ざすのではないかな。
8	<u>地元生にとって有意義なものになれば、地域住民にとっても良い。</u>
24	ホームステイで子どもを預かるのはとても大変。
17	人間形成の場として、適正な人数が必要に思う。
43	<u>受け入れ人数を増やしたために様々な問題を抱えているのが現状。</u>
62	<u>地域と行政が一体となって推進して行かなければ長続きしない。</u>
52	<u>地元生にも新しい刺激となり励みになる。農村と都市との新たな交流が農村発展への広がり。</u>
5	導入時より留学生の質が劣る。
3	今は親も手に負えない子が来て、 <u>地元生に悪影響。</u>
108	<u>地元生とのバランスを考えて受け入れて欲しい。</u> 1割程度が良い。
40	地域任せで道教委の態度がはっきりしていない。教育行政・教育理論を確立して欲しい。
41	留学生の割合が多くなっている現状で、本当の良い意味での制度とはかけ離れてきているのではないかな。何らかの問題を持った子が多く、親子留学で来るにしても、不自然な面が見られることもある。
34	留学生が来たことによって、地元生が「いじめ」を受けている子どももいる。ただ、増やして行けば良いというものではない。
44	<u>山村留学制度は、地域住民として良い。</u>
68	<u>センターがあって、子ども自身が学校を選択できることは良い。</u>

表2 地元卒業生から見た山村留学制度に関する意識

ケース	自由記述意見
11	良いと思う。
8	地域の活性化にもつながり大変良いと思う。全国、色々な所の人と出会えて良いと思う。
20	人数も増え、U地区も良い方面で変化していると感じている。この制度は成功だったと思う。
21	満喫した体験が沢山出来たと思う。人間関係にしても都会とは違った見方が出来た。
10	生徒が増えて良かったと思う。
3	メリット・デメリットの両方ある。すごく活性化され、学校の中にも新鮮な空気が取り入れられた。しかし、悪影響を与えたこともあったと思う。
13	少人数で活気があまりなかった時もあったが、留学生が来てから色々な事を知ることも出来たし、道外に遊ぶ友達が増えて良かったと思う。
16	多くの人と友達になれて良い。ただ人数が多いと押されてしまう部分がある。
18	制度が成功したと思う。地元の人達の暖かい人情あふれる中で生活し、広大な地域で伸び伸びできる事は来る方にとって幸せだと思う。
22	いいことだと思う。
19	仲良く学校生活を送れたのでいい制度だと思う。これからも続けてほしいと思う。
14	色々な刺激があってよい。
17	考え方の違いや異文化に触れることのできる数少ない貴重な体験が出来る制度。
12	人数が増える事は良いことだと思う。楽しい時間を過ごせることは良いことだと思う。
6	生徒が少なかったので、留学生が入ってきて良かった。
2	今は人数が多くて、地元生が留学生にあわせているような感じがして、ちょっと嫌だ。
7	楽しい思い出が多い。相手から学んだことも沢山あったと思う。
5	様々な地域の人と友達になれることは良いと思う。
1	新しい生徒が入ってくるのは良い刺激。過疎対策としても効果があったのではないかな。
24	都会の人と接することにより、良い刺激になった。
15	過疎化解消の策として希望する生徒全てを受け入れて、後は学校で責任を負ってください、という無責任な教育関係者の態度がなかったとは言いきれないと思う。
9	友達を増やす機会としては良い。でも、あまり留学生が増えすぎることは嬉しくない。何となく学校内の雰囲気が変わってしまうのが寂しい。
4	最近、本人に全く前向きな態度が見られないというケースも増えている点で問題。

表3 山村留学を契機とした学校観・教育観の転換に関する意識

ケース	自由記述意見
2	自分も含めて山村の子ども達の視野の狭さ・発想の貧困さを考えさせられた。
4	学校の教育条件として、小規模校程教育がやりやすく、いろんな条件を持つ子どもが留学してきても、一緒にやっていける場所だと思った。
5	人間の成長において、自然は不可欠なものと思う。
6	楽しい6年間を過ごすことができ、自分自身も丸い人間になったように思う。
7	入試制度の違い等を経験し、価値や発想の原点の違いを感じた。そのため、自分自身を磨くことができた。
8	受け入れ前は子ども像も分からず、反対することもあったが、受け入れてみるととても可愛い子ども達だった。
9	留学生を嫌うということではないが、公立学校は、地元生のためにあるべきだということを強く感じた。
10	山村だけではなく、都市の子どもも現代社会の歪みを受け、広く日本の子どもの現状が浮かびあがったこと。地域の自然を理解するために、学校に課せられたカリキュラム・規制の大きさ、学習指導要領への疑問が芽生え、行政の教育に対する制約の大きいこと。
11	教師業に就いていると、学校側から子どもを観る習慣が付いてしまうが、里親として留学生の世話をすることとなって、子どもの側から学校が観れるようになった。子どもの立場、親の立場から学校を観ると、教師時代には気づけなかった学校の姿を観ることがある。
12	体験学習の重要性を強く感じた。
14	制度そのものについては、大きな意義があるが、直接携わってみると、そこには、様々な人間関係とか、教師同志の価値観の問題・教育現場と教育行政との意志疎通、また、里親やセンター等、幾多の課題はあったが、何れにしても「子ども」に視点を置き、前向きに考えていくことが大切ではないか。
15	地域ぐるみの学校教育を具体的に進められたということは、すばらしいことであったと思う。
17	新たに教育全般を考え直すことができた。校長の姿勢が、山村留学や学校を変えていくものだと実感した。教育は理論ではなく実践なのだと思え、100%満足できる実践はないものという前提に立つことが大切ではないか。
18	単に地域における学校教師という偏狭な考えから、地域社会の全体的な活性化を思考したり、全国的な視野で教育を洞察するようになってきた。
19	自然を体験することで、すさんだ心もきれいになっていくと思った。
20	公教育という立場から、学校間交流の重要性、特に自ら学ぶ力の育成、体験学習の大切さを感じた。
21	「学校は授業を通して子どもを変えるところ」という都会の学校はどんな授業をしているのだろうか、親はどんな子育てをしているのか、疑問である。在校生の学校担任教師への不信感が異常に激しい。
22	幅の広い考え方で教育をする心の広さが出来た。
24	特にない。